



Data

監督: アンドレイ・ズビャギンツェフ

出演: コンスタンチン・ラヴロネン
コノマリア・ボネヴィーノ
レクサンドル・バルエフ/マ
キシム・シバエフ/カーチ
ャ・クルキナ/ドミトリー・
ウリヤノフ/イゴリ・セル
ゲイエフ/アナトリー・ゴル
グリ

👁️👁️ みどころ

長編デビュー作『父、帰る』(03年)で、いきなりベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞したロシアの映画監督アンドレイ・ズビャギンツェフによる長編第2作と第3作が同時に日本で公開!こりゃ必見!と思い、『ヴェラの祈り』を鑑賞。

ヴェラの「子供ができたの。あなたの子供ではないけれど・・・」という告白から始まる夫婦間の葛藤は想像を絶する方向へ進んでいく。なぜ、ヴェラはそんな(ウソの?)告白を?

多岐にわたる論点をしっかり整理し、かつ夫婦の機微に立ち入りながら、何とも悲劇的な結末に至る本作の心理劇を読み解きたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■ロシアのアンドレイ・ズビャギンツェフ監督に注目!■

長編デビュー作『父、帰る』(03年)でベネチア国際映画祭・金獅子賞を受賞したロシアの映画監督アンドレイ・ズビャギンツェフによる、2007年の長編第2作がコレ。日本では馴染みの薄いそんな映画が、ズビャギンツェフ監督の長編第3作『エレナの惑い』(11年)と同時に日本で公開されることとなったため、「こりゃ必見」と思い、まずは『ヴェラの祈り』の方を先に鑑賞。

ロシア映画はずっと昔のソ連時代の『戦争と平和』4部作(65~67年)や、ロシアのニキータ・ミハルコフ監督の『太陽に灼かれて』(94年)、『戦火のナージャ』(10年)、『シネマルーム26』110頁参照)、『遙かなる勝利へ』(11年)、『シネマルーム31』44頁参照)の「3部作」を見てもわかるように、大作が多い。本作も157分の長尺だ

から、かなりの大作。そう思っていたが、実はそうではなく、本作は一貫して家族をテーマとした映画を作ってきたズビャギンツェフ監督がアメリカの作家ウィリアム・サロヤンの小説『どこかで笑っている (The Laughing Matter)』をモチーフとし、男性中心の社会で生む女性の苦悩と孤独を描いた家族ドラマらしい。

私は『父、帰る』は観ていないが、『エレナの惑い』で第64回カンヌ国際映画祭「ある視点部門」審査員特別賞を受賞している、そんなロシアのアンドレイ・ズビャギンツェフ監督に、まずは注目！



©2007 RENFILM 配給：株式会社アイ・ヴィー・シー 全国順次公開

■□■突然の、この「告白」をいかに受けとめる？■□■

導入部の展開が終了した後、亡き父親が残した田舎の家に、妻ヴェラ（マリア・ボネヴィー）、長男キール（マキシム・シバエフ）、長女エヴァ（カーチャ・クルキナ）と共に出かけた夫アレックス（コンスタンチン・ラヴロネンコ）は、ヴェラから突然、「赤ちゃんができた。あなたの子ではないけれど」と告白されることから、本作の本格的なストーリーが始まっていく。

本作でカンヌ国際映画祭主演男優賞を受賞したコンスタンチン・ラヴロネンコが演ずるアレックスは、口数こそ少ないが妻にも子供達にも優しく。したがって、この彼の一体どこに問題が・・・？それにしても、ヴェラのそんな告白はいかにも唐突だし、その内容はあまりにも一方的！いきなりそんなことを妻から告白されたアレックスはいったいどうすればいいの？私ならとりあえず妻をぶん殴ったうえで、さてどうしようかと考えるところだが、さてアレックスの対応は？

■□■本格的評論はあきらめ、ポイントだけに・・・■□■

本作は本格的に評論しようとすれば、膨大なボリュームになってしまう。すなわち、そ



●2007 RENFILM 配給：株式会社アイ・ヴィー・シー 全国順次公開

れをやろうと思えば、本作と原作との関係、本作の主な舞台となる別荘や教会そして田舎の風景を中心とした映像の作り方はもちろん、冒頭に登場するアレックスの兄マルク（アレクサンドル・バルエフ）との関係や、赤ん坊の父親ではないかという疑いをかけられる男ロベルト（ドミトリー・ウリヤノフ）との関係等々を詳しく論じる必要がある。

また、アレックスの田舎の家の近くには、アレックスの旧友ヴィクトル（イゴリー・セルゲイエフ）が住んでいるが、彼には12才から10才までの3人の娘がおり、キールはその長女との間に淡い恋心を抱いているようだから、そんな思春期にあるキールが「あのおじさん、好きじゃない」と呟くロベルト像も大きなウエイトを持つてくる。したがって、本作についてそれらを詳しく書くのはあまりにも大変なため、それを諦め、ほんのポイントだけの評論にしたい。

■□■父親は誰だ？誰にどう相談すれば・・・？■□■

ヴェラからそんな告白を聞かされたアレックスが「ヴェラのお腹の子の父親は誰だ」と疑ったのは当然だが、そこでアレックスがそんな苦しい心情を「彼女を殺してしまいそうで怖い」と兄マルクに相談すると、それに対するマルクの答えは「殺したければ殺せ。ピストルは机の引き出しに入っている。許したければ許せ。決断するのはお前だ」とあまりに素っ気ない。そりゃそうかもしれないが、これではあまり参考にならない。

他方、私の目からみれば、アレックスは冷静にヴェラと話し合おうとしているように見えるが、「どうするつもりだ」との質問に対して、ヴェラは「あなたはどうしたいの？」と逆質問してくるから、2人の話は全く噛み合わない。しかし、それは一体なぜ？本作ではラスト30分の「タネ明かしの展開」の中でそれが解き明かされていくので、それはあなた自身の目でしっかりと。

■□■「墮ろそう」との合意の可否は？その後の展開は？■□■

とはいうものの、ストーリーは結局、アレックスの「墮ろそう」との提案に対してヴェ

ラが「好きにして。これ以上は待てない」と返事したことによって、ヤミ医者を呼んでの堕胎手術という流れになっていく。そこまでは想定内だが、本作ではそれ以降の展開が全く想定外のものになっていくので、それに注目！その第1は、なんとあつけないヴェラの死亡。第2の想定外の展開は、ヴェラの死に続いてマルクまでが倒れてしまうことだ。こりゃ、一体どうなってるの？

そのうえ、マルクが呼んだ医者話によると、ヴェラの死亡原因にはアヘンもしくは麻酔の過剰投与の可能性があるうえ、ヴェラのベッドには妊娠診断書もあったそうだ。さて、そこには一体何がどう書かれていたの・・・？マルクが依頼したヤミ医者は「堕胎手術は順調に終わった。痛み止めの薬を置いておくので、1日に3回それを飲ますように」と言っていたはずなのに・・・。このように本作は中盤から最後にかけてはミステリーじみた色彩が強くなっていくので、その展開をしっかり。



©2007 RENFILM 配給：株式会社アイ・ヴィー・シー 全国順次公開

■□■子供は誰の所有？親それとも社会？■□■

本作はラスト30分のタネ明かしの展開に入っていく中、マルクから預かっていた拳銃を持ってアレックスがロベルトの家を訪れるから、やはりヴェラのお腹の子の父親はロベルト！観客の誰もがそう思うでしょうが、実はタネ明かしの展開の中でヴェラがロベルトに話したのは、「赤ん坊はアレックスの子供だけれど、アレックスの子供ではない」ということ。正確には、そのセリフは「彼の子よ。でも彼だけの子ではないわ。私たちが誰の子でもないように」というものだ。これって一体どういう意味？パンフレットによると、こちらあたりのつくり方については、ウィリアム・サロヤンの原作とズビヤギンツェフ監督の脚本とはまったく内容が異なっているらしい。

パンフレットにある、馬場広信氏（早稲田大学比較文化研究者）の「21世紀人による作家たちへの意趣返し」と題された解説では、「生まれた子供は親の所有物ではない。社会

が子供を育むのだ。生命は親にとっても『他者』の命だ。自己都合で安易に殺されるべきではない」と述べている。なるほど、そういうことか。すると、本作が一番言いたいことはナニ？そしてヴェラが最も悩んでいたことはナニ・・・？



©2007 RENFILM 配給：株式会社アイ・ヴィー・シー 全国順次公開

■□■セリフの少ない展開をじっくりと！小道具にも注目！■□■

本作は157分と長尺だがとにかくセリフは少ない。しかし、1つ1つの情景の描写は丁寧だから、セリフは少なくとも十分理解することはできる。本作のストーリーを動かす小道具は第1に電話。2007年作の本作に登場する電話が携帯ではなく、リンリン鳴る古めかしい固定電話という設定が面白いが、それ以上に、本作ではこの電話での会話によるストーリーの動かし方に注目したい。さらに、丁寧にフォローされる自動車の動きと駅が果たす役割にも注目したい。

導入部で提示された、ヴェラのお腹の子の父親は誰か？というテーマは、ラスト30分のタネ明かしの展開の中で明らかにされるから、ロベルトの家に拳銃を持って押しかけていったアレックスのその後の行動も当然予想されることになる。しかし、それをしっかり理解するためには157分間しっかり本作を鑑賞することが不可欠だ。そうでなければ、映画終了後、1人のアホバカ観客が前に座っていた見ず知らずの観客に言った、「あの拳銃は結局撃たなかったの？ええ、なんで・・・？」のような発言になってしまうので要注意！

2015（平成27）年2月24日記